なごや文化情報

2012
11
Nov.

No.344

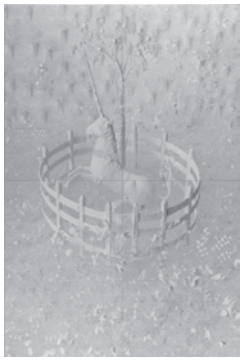
NAGOYA
Cultural
Information

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2012
11
Nov.

Contents

十一月のうた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
随想　堤 幸彦 演出家・映画監督・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
視点 「みんなのリーディング」に懸ける情熱と新しい表現
まとめ／倉知外子・・・・・ 4
この人と…　加野昭二郎さん（上） 聞き手／飯塚恵理人・・・・ 6
ピックアップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
おしらせ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9



表紙

作品
「(09-7) UNICORN IN CAPTIVITY」
(2009年/194×130cm/パネルに印画紙、樹脂、その他、写真にエッチング)

ニューヨークにあるタペストリー「囚われの一角獣」をモチーフに制作したものです。この原作は誰が作ったか分からない作品ですが、一度見たら忘れられないイメージに強く惹かれて作った作品です。

山田　純嗣（やまだ　じゅんじ）
1974年　長野県飯田市生まれ
1999年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了
2006年　「VOCA2006」上野の森美術館
2009年　個展　中京大学アートギャラリー
C・スクエア（名古屋）
2010年　平成21年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞
2012年　「ポジション2012」名古屋市美術館

十一月のうた

鶴家族

服部 鹿頭矢（はっとり かずや）

来し鶴の棹まだ解かず干拓田
今し来て群にまぎれず鶴家族
湯浴みても耳を離れず鶴の声
冬菊や火山灰に埋れし村悼む
壺畑の酢を醒ますなり冬うらら

「ハッ」とすることは、俳句のもととの出会いといえます。普段の暮らしで、この「ハッ」とする気持ちを保ち続けることは並大抵のことではありません。俳句には、近くの公園に出掛けるとか、海外旅行するなど、平常と異なった状況でものに接する吟行という方法があります。吟行の目的は、平生の環境を飛び出して、自分でも知らなかった「ハッ」とする自分の発見ともいえます。いつまでも、吟行で新鮮な自分との出会いを楽しみたいものです。

随想

「名古屋マニアック」

つつみ ゆきひこ
堤 幸彦（演出家・映画監督）

1962年から1973年までの13年間生活していただけの「旧名古屋市民」の私が名古屋の文化・芸術状況を語る資格を有するかわからないが、名古屋には同級生、仕事関係者、学術・地域振興関係の仲間がたくさんいて、何度もドラマや映画を撮らせていただき、かつ本山に実家が存在し『紛うことなき出身地』であるからして、ひとことぐらいよかろうか。

私が考える名古屋の文化・芸術のキーワードは「ポップス・ロック分野におけるマニアック性」である。西洋音楽に目覚めた1970年代前半、私達名古屋のギターキッズはコメ兵でGSの残存ギターを手に入れ、全国に先駆けてディープパープルやレッドツェッペリンを両巨頭とするブリティッシュロックのレコードを名大生協で買い求め、演奏テクニックを盗み、そのスタイルを真似た。ディープパープルの大ヒット曲「ブラックナイト」は名古屋のFM局から火がつき全国に広がったのは有名な話だ。名古屋人の「マニアックな先物買い」の一例である。

しかし、全国をブリティッシュロックが席巻するや、東京でも大阪でもない反骨精神からか、あっさりと「米国のライフスタイルと一体化した拘りの強い音楽」に移行する。イーグルス、ドゥービーブラザース、オーリアンズ…ヒット性よりもメロディ重視、技巧的演奏、全員コーラスなどを追求していくミュージシャンが増える。その時代の名古屋のLA的空気にぴったりとはまったのだろうか、だがあくまで「マニアックな先物買い」であり、全国的に一般化するのは1980年代まで待つ事になるが。

その先頭を走っていたのが1973年結成、現存する日本最古のロックバンドであるセンチメンタル・シティ・ロマンスである。彼らこそが青春時代の「発見」を骨肉化し、オリジナルポップスに昇華させ、いまだに変わる事なくそのスタイルを続ける「名古屋マニアック」の権化であり、高い演奏力を保持し、歌詞なども「名古屋性」にこだわり続けている唯一無二のバンド。最新アルバム「やっとかめ」は結成当時と変わらぬ肩の力が抜けた“名古屋マニアック”感にあふれ、リーダー告井氏は61才、バンドの顔・中野氏は58才に至るも、あの頃と変わらない若々しいギタープレイを仲間と繰り広げる。メンバーのほぼ全員がセオリー通りヴォーカルが出来、多様な楽器を駆使する。ショービジネスとしてのロックとは違うレールを走り続け、ヒップホップやパンクスも含めた多くの若手ミュージシャンの目標となっている。

去る9月20日から同じく名古屋出身のやはり「こだわり」のマルチ女優・戸田恵子さんのコンサートでサポート演奏してもらったが、気心のしれた名古屋人同士、アットホームでしかも随所に名古屋要素をまぶした楽しいコンサートになり、かつ音楽的質も高く、50代半ばにしてやっと「名古屋マニアック」を東京のステージに反映する事ができ、元名古屋人冥利に尽きた。

変わらぬものがそこにある。そしてそれは東京でも大阪でもNYでもLAでもロンドンでもない、名古屋マニアック。それを感じる事は、生き馬の目を抜く東京でほっとする瞬間だ。

Report

視点

「みんなのリーディング」に懸ける情熱と新しい表現

名古屋市文化振興事業団主催による、みんなのリーディング「KANOKO」が12月1日（土）に開催される。この企画公演は平成17年度から毎年、名古屋市芸術創造センターにて開催されているが、毎回行われるオーディションは、応募者多数の狭き門である。

今年の演目は、歌人で小説家、そして「芸術は爆発だ！」で有名な岡本太郎の母として大正・昭和を駆け抜けた「岡本かの子」。その劇的な生涯を描きだす。選ばれた出演者と専門スタッフがどのように本格的な舞台を創りだしてくれるのか注目したい。　　（まとめ:倉知外子）

◇だれでも参加できる本格的な舞台体験

出演者は、舞台経験の有無を問わず、高校生からシニアまで幅広い世代の市民を対象として公募され、オーディションで選ばれる。毎年、プロの演出家、講師の指導をうけて、照明・音響・舞台美術などを伴った本格的な舞台で表現してみたいと、応募が多数寄せられている。オーディションの競争率はその時々の演目にもよるが、いずれも3倍から5倍と非常に高い。過去の出演者は応募不可で、練習回数は12回と少なく欠席は許されないなど、たいへん厳しい条件だが、何度もチャレンジしている人も多いようだ。第8回を迎える今年は、募集人数30人に対して応募が140人と例年通りの応募多数となった。

◇過去７回の実績

まず、入場料が1,000円と安価で、公演日が土曜日の午後に設定されているので、観客が足を運びやすい。過去7回の観客動員数は延べ3,200人を数え、初回は超満員であった。

それでは、今までの演目を列記しよう。第1回「宮沢賢治　銀河から野原から」構成･演出　いのこ福代､第2回「ハーンの面影　～ラフカディオ・ハーンを読む～」構成・演出　麻創けい子、第3回「てのひらの朗読　現代作家を聴く」構成・演出　菊本健郎、第4回「空のまにまに　～幻想朗読会～」構成・演出　齋藤敏明、第5回　「うしろ姿のしぐれてゆくか　～漂泊の俳人　種田山頭火～」　台本･演出　大嶽隆司､第6回　「労読劇　ピノキオの冒険」台本･演出　佃　典彦、第7回　「いろとりどりのラブレター　～伝えたい、本当のキモチ～」　構成・演出　小田靖幸。

毎年、地元で活躍する演出家を起用し、質の高い公演を目指してきた。今年の「みんなのリーディング」では､構成･演出に劇作家、演出家である、はせひろいち氏と講師に本岡銀子氏を迎え、「KANOKO」（マキノノゾミ作）に挑む。

◇参加への熱い想いと情熱

私は今回、8月18日に行われたオーディションの様子を少し取材することができた。

この日は午後から豪雨となり、一部の地域では電車や飛行機が不通で、残念ながら指定された時間に間に合わない受験者もいたが、およそ9時間にも及ぶオーディションが行われた。

応募者多数のため、10人ごとの14グループに分け、各グループわずか30分で審査する。私は、そのうち2グループを見学したのだが、受験者の迫力と情熱に圧倒された。初見の台本を読んだり、参加の動機なども質問されていたが、特に、前もって渡された課題では、何度もセリフの練習を重ねていることがよく解かり、ぜひ参加したいという熱い想いがひしひしと伝わってくる。

高校生、大学生、社会人と各々に職業（例えば観光ガイド、アナウンサー、主婦、学校の先生など）を持ちながら、夢のような「ドラマリーディング」にあこがれて集まった市民が大勢そこにいた。なかでもシニアの70代、60代の人達は若々しくも人生を重ねていることの味わいを感じさせた。

朗読や演劇が好き、将来への夢に向かって、何かやって

オーディションの審査風景

みたいから、人生最後のチャレンジとして…など様々な想いがいっぱいで、全員が素敵に見え、選抜するのが大変な作業になることは想像に難くなかった。

◇ドラマリーディングとは？

オーディションを終え、出演者が決まったところで、演出のはせさんにインタビューをした。はせさんは「ドラマリーディング」を朗読劇と演劇の中間と考える。

「ドラマリーディング」には、作品によっていろいろなタイプがある。ラジオドラマなどは、セリフを記憶しなくてもよいが、群読では原則、口語で話して会話ができることとそのセンスが有るか無いかが問われ、言葉の世界に空間状況がイメージできる表現が求められる。オーディションの課題では、両川岸に5人ずつが立ち、川を隔ててセリフを掛けあう設定であった。

はせさんは「各世代から均等に選ばれたのでそれぞれの持ち味を活かしたい。年代の高い人達からは人生体験などから得た深い表現を添えて、ドラマリーディング創りに協力してほしい」と謙虚に語られた。経験のない人でも気軽に参加でき、一定の練習を重ねれば芸術表現として認められる市民権が得られるようにしたいと公演の抱負を聞くことができた。

第1回練習風景

◇「KANOKO」の魅力

はせさんがマキノノゾミ氏原作である「KANOKO」という戯曲を採りあげたいきさつを伺った。

「背景が小劇場風に書かれていて一番手強いが、素晴らしい戯曲であるとかなり以前から魅力を感じていた。」と意欲を見せる。

はせさんは、以前よりドラマリーディングに関して「全く新しい芸術表現」との立場をとり、独自の方法論で作品創りをしている。今回の作品も同様の手法で作品創りにのぞむ。歌人、小説家そして、あの独特の世界観と個性で生きた画家で芸術家の岡本太郎の母として大正、昭和を駆け抜けた「岡本かの子」の破天荒な愛のカタチに焦点をあて、その生きざまを描きだしたい。そこに重なって岡本太郎芸術が生まれた必然性もみえてくるように思うと語る。応募者のなかには「岡本かの子」に惹かれてとか、「はせさんの作品に参加したい」という動機の人が少なくなかった。

◇これからのリーディングの効能

筆者の知人で第5回に出演した人に感想を聞いてみた。「まず、参加できたこと、そして素人でも指導をうけて本格的な舞台に立ち、表現できたことが嬉しかった。そして様々な出会いの中で刺激しあい、難しいと感じることもあったが、充実して楽しかった」と懐かしそうに語った。

「みんなのリーディング」は、若い世代とシニア世代の出会いの場としての役割も果たしていた。コミュニケーションを求められることで必然的に交わされる言葉のキャッチボールは、人として生きていくのに大切なことであろう。現在、自分の心をうまく表現できなかったり、感情のコントロールがうまくできない、相手を傷つけやしないかと言葉を発することを恐れたりする人たちが多いと、社会問題になっている。筆者個人の考えであるが、日本語で大きな声で話すこと、セリフに心の中を重ねてイメージすること、また、人と人とが対面することなどは、より良い人格形成に大きく貢献できるといえる。

そして、最終目標である本番には、勇気を出して大勢の観客の前に立つことができた経験と成し遂げた達成感に、何ものにも代えられない自信を得るのではないだろうか。

この「みんなのリーディング」を取材して上記の視点から、今の社会のニーズに添った意義が多大にあると実感した。

本格的な舞台で創りあげる「ドラマリーディング」は、まさしく市民に寄り添う公演であると改めて思った。長く継続してほしいと願い、まもなく公演を迎える「KANOKO」に期待したい。

平成23年度「いろとりどりのラブレター」

この人と…

『能楽の友』主宰

加野（かの） 昭二郎（しょうじろう）さん 上

今回・次回の「この人と」は、昭和43年から現在に至るまで名古屋の能楽界の情報を発信する専門紙『能楽の友』を主宰されている加野昭二郎氏にお話を伺う。名古屋市を中心とする中部圏の能楽の催しや動向を調べ、報道し続けている『能楽の友』の存在は、名古屋市民への能楽の普及に大きな役割を果たしている。「報道」の立場で名古屋の能楽界をサポートする加野氏に、名古屋の能楽界の歩みと今後への期待を伺った。　（聞き手：飯塚恵理人）

生い立ち

加野昭二郎氏は昭和2年1月23日、岐阜県岐阜市七軒町に、守口漬製造で知られた加納食品を経営する加野寿一氏の二男として生まれた。寿一氏は淡交会（先代橋岡久太郎師主宰）系統の先生について観世流の謡曲を習っていた。加野氏は岐阜商業学校を昭和18年繰り上げ卒業の後、19年4月に満州国立大学ハルビン学院に入学、同校在学中の20年7月に召集され、終戦で除隊、翌21年8月に日本に引き揚げてきた。加野氏はロシア語が話せたため、終戦から引き揚げの時までロシア語の通訳として、中国長春鉄路公司（旧・南満州鉄道）に勤務、21年10月に東京外事専門学校（現在の東京外国語大学 ロシア語専攻）の二年に編入学、卒業後、23年4月に中日新聞社に入社した。昭和25年8月に退社するまでの2年ほどの間に中日新聞謡曲倶楽部で謡曲に出会った。加野氏在籍中の中日新聞謡曲倶楽部には観世流と宝生流の二流があったが、加野氏は父の影響もあり、観世流の高野瀬透師について謡曲を学んだ。中日新聞退社後、昭和38年に中部眼鏡宝飾新聞社に入社した。

東区橦木町高野瀬師宅にて　左が加野氏・右が高野瀬師

戦後の能楽復興と名古屋薪能の創設

戦後の復興、朝鮮戦争など昭和20年代を経て、昭和30年に熱田神宮能楽殿が完成した。戦後の混乱がようやく収まり、人々が生活に潤いを求め始めていた時期だった。会社の能楽サークルなどの活動が盛んになり、催しを行うにしても、かつてのように旦那衆が催しの全額を負担するのではなく、愛好者が集まって少しずつを負担し催しを行うようになる時期であった。さらに知識人階級・主婦層などへ能楽愛好者が広がりつつあった。

「いきなり能楽堂に訪れることには抵抗があるが、一度どのようなものかは見てみたい」という「能楽初心者」へ能を普及させるためには、屋外イベントのような形の「薪能」

などを行うことが効果的である。加野氏はその頃、宝飾商だった花木徳三郎氏の知遇を得た。花木氏が住んでいた末廣町、鉄砲町辺りは山田仁三郎氏や伊藤鉄之進氏など金剛流の能を稽古している人が多く、氏も金剛流の謡曲を習っていた。シテ方の金剛流とワキ方の高安流は、高安流が江戸時代幕府の金剛座の座付（専属）のワキ方であったこともあり、地方においても交流が深かった。このようなこともあり、花木氏はワキ方高安流宗家高安滋郎師やその父親の高安流ワキ方西村弘敬師とも親しかった。この花木氏が有力な氏子として役員を務めていた若宮八幡社で、昭和41年8月6日に後に「名古屋薪能」として定着する「薪能」が名古屋で初めて行われた。名古屋において、神社の神楽殿等を会場とした観客席が屋外の能は古くから催されていた。「薪能」は単なる屋外舞台での能ではなく、昼間働いている人で夕方以降ならば能・狂言を観に行ける人を対象としている点に新機軸があった。観光的なイベントとして、「火入れ式」などの儀式も催しの中に取り入れた。

薪能の火入れ式（第10回）

当時こうした催しの費用は、実質的には協賛企業や旦那衆による寄付で賄っていたが、一般市民を対象としチケットを販売するイベントとして継続的に行うためには、観客の大量動員が不可欠となる。能を習っていない一般の人々に「能とはどのようなものか」、「どこで行われるか」、「チケットはどこで入手できるか」等の情報を広く知らせる必要が生じた。この薪能でも「知らせないでチケットが売れないといっとってはいかんわなあ。」という声が上がったのである。これが『能楽の友』創刊の大きなきっかけとなった。多くの市民を観客として動員する薪能などでは特定の流儀に偏らず、どの流儀の演目も催しに入れる必要がある、またそのような催しのチケットを販売するには流儀・社中を越えた能の専門紙が必要であるという考え方を持った花木氏と加野氏、さらに二人に共鳴した高安滋郎、田鍋惣一郎両氏をはじめとする能楽師たちが名古屋薪能の推進役と『能楽の友』社設立の際の編集同人となった。編集同人は発刊時から少しずつ増えた。昭和43年10月号当時の編集同人を挙げると、「伊藤鉄之進（金剛流シテ方） 井上松次郎（和泉流狂言方） 梅田邦久（観世流シテ方） 大塚一二（金剛流シテ方） 長田驍（喜多流シテ方） 加野昭二郎（新聞記者） 佐藤卯三郎（和泉流狂言方） 柴田初太郎（観世流シテ方） 杉村竹翠（観世流シテ方） 高安滋郎（高安流ワキ方） 筧三男（藤田流笛方） 田鍋惣一郎（幸清流小鼓方） 戸田秀雄（聖霊病院医師・宝生流シテ方） 殿島修二（観世流シテ方） 内藤泰二（宝生流シテ方） 野村又三郎（和泉流狂言方） 花木徳三郎（宝飾商　花木商店経営） 二井栄逸（喜多流シテ方）」それに長谷晴男氏（熱田神宮権宮司・熱田神宮能楽殿運営委員長）らが加わる。

「能楽の友」同人

創刊当時の『能楽の友』は財政的に極めて厳しく、能楽師を中心とする発起人・有志が個々に一万円を拠出、同人一同で購読者の呼びかけ、勧誘に努力した。その結果、ほぼ購読料のみによる運営が可能になったが、これも“文化都市名古屋”をめざして能楽界から一隅を照らそうとする能楽師たちの熱意と情報重視・地域密着・不偏不党の報道姿勢への愛好者・一般市民の期待と信頼がなしえたことであろう。

（次号に続く）

ピックアップ

愛知芸術文化センター開館20周年記念
《ランメルモールのルチア》

9月17日、愛知県文化振興事業団の12本目のプロデュースオペラ、ドニゼッティの《ランメルモールのルチア》が愛知県芸術劇場大ホールで上演された。愛知芸術文化センターが開館し、愛知県文化振興事業団が創立されて20年。その記念の公演である。

1992年、愛知県芸術劇場大ホールはバイエルン国立歌劇場の引っ越し公演で幕を開けた。とりわけ、市川猿之助演出によるリヒャルト・シュトラウスの《影のない女》が大きな話題となり、本格的なオペラ劇場で見る斬新で独創的な舞台の様子は今も私の記憶にはっきりと刻まれている。翌年から事業団のプロデュースオペラがスタートし、2005年の《白鳥》が佐川吉男音楽賞を、2008年の《ファルスタッフ》が三菱UFJ信託音楽賞を受賞し、2010年のあいちトリエンナーレのための《ホフマン物語》は海外でも上演という躍進をとげている。そして今年の《ランメルモールのルチア》は、名古屋フィルハーモニー交響楽団との共同招聘によるマッシモ・ザネッティの指揮、岩田達宗の演出で行われた。

恋人との仲を引き裂かれ政略結婚を強いられるルチアに佐藤美枝子、ルチアの恋人エドガルドに村上敏明、ルチアの兄エンリーコに堀内康雄。いずれも日本を代表する歌手たちで、長大な狂乱の場を見事なコロラトゥーラで歌いきった佐藤はもちろん、村上と堀内も卓越した表現力と美声で聴衆を魅了した。地元の若手、伊藤貴之がルチアの家庭教師ライモンド役として落ち着いた良い味を出していたのも印象的である。

岩田の演出はシンプルでドラマティック。華麗な声の饗宴にとどまらない緊密な音楽劇に創り上げていた。（ヨーロッパ各地の歌劇場での活躍が目覚ましいザネッティが、今回の岩田の演出を高く評価しているという。）名古屋フィルハーモニー交響楽団もすでに9月7日、8日の定期演奏会を振っているザネッティとの良い呼吸で物語をテンポ感よく運び好演。全体的に質が高く、事業団のプロデュースオペラがだんだん練れていき独自のスタイルを確立しつつあることが感じられた出来映えだった。文化予算削減という厳しい状況にさらされながらも、長年に渡る経験の積み重ねが確かな実りを結んでいるのではないだろうか。

来年は、「あいちトリエンナーレプロデュースオペラ」第2弾としてプッチーニの《蝶々夫人》が予定されている。（O）

2012年 愛知県文化振興事業団プロデュースオペラ「ランメルモールのルチア」
（写真：中川幸作）

1992年バイエルン国立歌劇場公演「影のない女」
（写真・©木之下晃）

おしらせ

名古屋市文化振興事業団 事業案内・チケットガイドでは各種の事業案内、チケット販売をいたしております。
平日 9：00〜17：00 ／チケット郵送可　　TEL 052-249-9387 ／ FAX 052-249-9386

名古屋市文化振興事業団2013年企画公演
オペレッタ『こうもり』

名古屋市文化振興事業団では、毎年、地元で活躍する音楽・演劇・舞踊をはじめとする舞台人の総力を結集し、新しい可能性を追求する企画公演を開催しています。

第29回目を迎える今回は、「美しく青きドナウ」「皇帝円舞曲」で知られるワルツ王　ヨハン・シュトラウスⅡ世によるウィンナ・オペレッタの最高峰　「こうもり」を日本語上演します。

オーディションによって選ばれた出演者と生のオーケストラが、オペレッタの王様と名高い「こうもり」の世界を底抜けに楽しい物語、美しく心躍る音楽にのせてお贈りします。この機会にどうぞご来場ください。

作曲／ヨハン・シュトラウスⅡ世　　音楽監督・指揮・編曲・訳詞／井村誠貴　　上演台本・訳詞・演出／伊藤明子
振付／徳山博士　　管弦楽／セントラル愛知交響楽団

日　　時　2月22日（金）18:30
23日（土）11:00　16:00
24日（日）11:00　16:00

会　　場　青少年文化センター・アートピアホール［ナディアパーク11F］

料　　金　S席5,000円（1F）　A席4,000円（2F）〈全指定席〉　※事業団友の会会員は１割引

チケット取扱い　・チケットぴあ［Pコード：182-835］　TEL 0570-02-9999
・名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL 052-249-9387（平日9:00〜17:00/チケット郵送可）
・名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口（東山荘を除く）

発売予定日　11月14日（水）〈友の会先行販売11月12日（月）〜13日（火）〉

主　　催　公益財団法人名古屋市文化振興事業団

助　　成　芸術文化振興基金

問い合わせ　名古屋市文化振興事業団　チケットガイド　TEL 052-249-9387

【ストーリー】

役人を侮辱した罪で刑務所に入ることになったアイゼンシュタインは、“こうもり博士”とあだ名されている友人ファルケに『刑務所に行く前の憂さ晴らしをしよう』と誘われ、妻のロザリンデに内緒でオルロフスキー公爵が主催するパーティーへ出掛ける。しかし、それは以前にアイゼンシュタインのいたずらのために恥をかかされたファルケの仕返しの計画だった。

アイゼンシュタインはフランスの侯爵といつわり、パーティーに出席する。そこにやってきたハンガリーの貴婦人を口説こうとするが、実は彼女は仮装した妻のロザリンデだった。アイゼンシュタインは口説くことに失敗したばかりか大切な懐中時計まで取り上げられてしまうが、それでも妻だと気づかない。

翌朝、刑務所に出頭したアイゼンシュタインは、既に自分が牢に入っていると聞き驚くが…

【ヨハン・シュトラウスⅡ世】

ヨハン・シュトラウスⅡ世は、1825年オーストリアのウィーンで生まれた。父は、ウィンナ・ワルツの基礎を築き、「ラデツキー行進曲」などを作曲して「ワルツの父」と呼ばれたヨハン・シュトラウスⅠ世。父の才能を受け継いだヨハン・シュトラウスⅡ世は19歳で自身の管弦楽団を設立した。指揮者・作曲家として活動し、情熱的な演奏と、才能豊かな作曲で、一躍ヨーロッパの聴衆から熱狂的な支持を受けた。ヨハン・シュトラウスⅡ世は、その生涯をウィンナ・ワルツの作曲に捧げ、「美しく青きドナウ」「皇帝円舞曲」など数々の名曲を残し、後に「ワルツ王」と称されるようになった。またワルツ以外にもオペレッタ、ポルカなども作曲し、特にオペレッタ「こうもり」は1874年の初演以降、音楽の街ウィーンだけでなく、ドイツ・イギリスなどヨーロッパ各地の歌劇場で大晦日に上演されるほど、愛される作品となった。その功績が讃えられ、オーストリアではヨハン・シュトラウスⅡ世の肖像が100シリング紙幣に描かれていたこともあった。

文化小劇場 芸術三昧！シリーズ

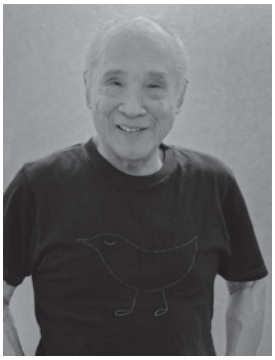
「文化小劇場芸術三昧シリーズ」は、名古屋市内各区にある文化小劇場を会場とし、質の高い公演を地域の方々に身近に気軽に鑑賞していただきます。生の芸術の感動・素晴らしさに触れていただき、地域文化の振興に寄与したいと考え実施いたします。上期に続き下期6公演も多彩なラインナップです。ぜひお楽しみください。

●チケット取り扱い一覧●
・名古屋市文化振興事業団 チケットガイド　TEL 052-249-9387
・各文化小劇場をはじめとする、名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口（東山荘を除く）
・チケットぴあ　TEL 0570-02-9999　・サークルK・サンクス、セブンーイレブン　・e+ イープラス　http://eplus.jp
※①～④、⑥未就学児の入場はご遠慮ください。⑤のみ 未就学児も鑑賞可能です。3歳以上有料。
※事業団友の会会員は1割引（前売りのみ）
※全6公演のうち、4公演以上同時購入の場合、15%OFF
（名古屋市文化振興事業団チケットガイドと名古屋市文化振興事業団管理施設窓口のみの取扱いです）

☆問い合わせ　名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL 052-249-9387

① 谷川俊太郎&DiVa「うたをうたうとき 朗読と歌のコンサート」

谷川俊太郎が詩を朗読し、そして息子・谷川賢作が率いるバンドDiVaが詩を音楽にのせて歌います。二十歳で詩集「二十億光年の孤独」を著し、常に書き続け八十歳を超えた詩人が、どの作品を聞かせてくれるのでしょうか。質問コーナーもあります。



©FUKAHORI mizuho

日　時　1月12日（土）15：00開演（14：30開場）
会　場　中村文化小劇場（TEL052-411-4565）
料　金　3,000円〈全指定席〉
Ｐコード　424-392

② 守山区制50周年記念特別演奏会 小山実稚恵ピアノ・リサイタル

チャイコフスキー国際コンクール第３位、ショパン国際ピアノコンクール第４位、二大コンクールで入賞した唯一の日本人として人気・実力ともに日本を代表するピアニスト。守山区制50周年を飾るこの特別演奏会で、ピアノの魅力を存分にお楽しみください。

©Wataru Nishida

日　時　1月25日（金）18：45開演（18：15開場）
会　場　守山文化小劇場（TEL052-796-1821）
料　金　3,500円〈全指定席〉
Ｐコード　182-975

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ビデオソフトの企画・制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

TOKAI VIDEO SYSTEM
ハードシステム部門
AV機器販売部門（家庭用）
映像企画・制作部門
放送関連部門
機器設備レンタル部門
映像メディアの未来を創る
生きた情報を発信
TVS 株式会社 東海ビデオシステム
名古屋市中区上前津二丁目14-15　TEL.＜052＞322-6541（代表）6562（芸能部）

innovason Ether ES Sound
L-ACOUSTICS lake whirlwind
■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守
A&V Professional Use
株式会社エーアンドブイ
〒464－0846
名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL052（761）5400
FAX052（761）0909

③ つじあやのコンサート

ウクレレを奏で歌う、つじあやの。スタジオジブリの映画「猫の恩返し」の主題歌「風になる」のヒットで知られるウクレレ・シンガー・ソング・ライターです。
ふわふわと心地よく、甘く切ない乙女チックワールドを体験してください。

日　　時 2月1日(金)18:30開演(18:00開場)
会　　場 千種文化小劇場(TEL052-745-6235)
料　　金 3,500円〈全指定席〉
Ｐコード 182-977

④ 渡辺香津美 ギター・ルネッサンス

世界に誇るギターマエストロがライフワークとして取り組んでいる究極のソロプロジェクト。注目のシンガー・ソング・ライター、SHANTI を迎え、ジャズ、ビートルズ、クラシック、そして自作など幅広いジャンルの曲目を圧倒的な演奏でお楽しみいただきます。

日　　時 2月15日(金)18:30開演(18:00開場)
会　　場 熱田文化小劇場(TEL052-682-0222)
料　　金 3,500円〈全指定席〉
Ｐコード 182-979

©Leslie Kee

⑤ 人形劇団ひとみ座「弥次さん喜多さん道中記」七度狐の巻

「東海道中膝栗毛」弥次喜多コンビの珍道中を人形劇団ひとみ座が演じます。
明るく陽気な江戸っ子弥次さん喜多さんの抱腹絶倒二人旅。旅の途中、ひょんなことからいたずら狐にうらまれ何度もだまされます。二人の泣きっ面は、いつまで続くやら…。

日　　時 2月23日(土)14:00開演(13:30開場)
会　　場 西文化小劇場(TEL052-523-0080)
料　　金 シングル1,500円　ペア2,800円〈全指定席〉
Ｐコード 424-396

⑥ 青島広志おしゃべりコンサート「ゆかいなオペラ入門編」

テレビ朝日「題名のない音楽会」アドバイザー、日本テレビ「世界一受けたい 授業」出演など常に音楽の素晴らしさ、楽しさを拡めている作曲家で指揮者の青島広志。テノール歌手小野勉とオペラの世界に誘います。あなた様もオペラの虜になりますでしょう。

日　　時 3月1日(金)18:30開演(18:00開場)
会　　場 天白文化小劇場(TEL052-806-8060)
料　　金 3,000円〈全指定席〉
Ｐコード 182-986

©Gakken Pub

あなたの芸術文化ライフを総合的にサポートします！
公益財団法人名古屋市文化振興事業団
「友の会」会員大募集！

エンジョイコース（年会費 3,000 円）
・事業団主催公演チケットの割引販売！
・事業団主催公演指定席チケットの先行販売！
・「友の会だより」「なごや文化情報」を毎月お届け！など

クリエイティブコース（年会費 15,000 円）
・会員主催の公演チラシを事業団管理運営施設へ配送！
・会員主催の公演チラシを友の会会員へ配布！
・会員主催の公演で事業団の後援名義が使用できる！など

名古屋市文化振興事業団　事業案内
TEL 052－249－9387

名古屋市文化振興事業団
事業案内・チケットガイド

名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8F
TEL 052-249-9387／平日9:00～17:00※郵送対応可

○事業団主催事業のお問い合わせ

○チケット販売
- 事業団チケット販売システムでのチケットの販売（「チケットぴあ」の取り扱いはありません。）
  ※チケット販売システムで販売のチケットは名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口でもお求めいただけます。（東山荘を除く）
- 事業団友の会クリエイティブコース会員様のお預かりチケットの販売。

○文化芸術相談窓口

○チラシの受付

「なごや文化情報」編集委員

飯塚恵理人（椙山女学園大学文化情報学部教授）
小 沢 優 子（名古屋音楽大学講師）
倉 知 外 子（オクダ モダンダンス クラスター副代表）
酒 井 晶 代（愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授）
田中由紀子（美術批評／ライター）
はせひろいち（劇作家・演出家）

当事業団の募集する事業にお申し込みいただいた場合の個人情報は、当該事業に関する事務連絡及び、当事業団の文化事業に関する案内のみに使用させていただきます。

Information

みんなのリーディング「KANOKO」

第8回を迎える今年、「みんなのリーディング」のテーマは歌人、小説家、そして岡本太郎の母として大正・昭和を駆け抜けた「岡本かの子」。その破天荒な愛のカタチを描きだします。

厳しい審査をくぐり抜けた30人の出演者が12回の練習を経て、劇的な生涯を歩んだ女性の人生を表現豊かにお贈りしますので、ご期待ください！

日　時　12月1日(土)15:00

会　場　芸術創造センター

料　金　1,000円<全自由席>
※事業団友の会会員は1割引(前売りのみ)

チケット取扱　名古屋市文化振興事業団
チケットガイド TEL 052−249−9387
(平日9:00〜17:00／チケット郵送可)
名古屋市文化振興事業団が管理運営する文化施設窓口(東山荘を除く)
チケットぴあ[Pコード:424-640] TEL 0570-02-9999
※サークルK・サンクス、セブン-イレブンでも直接お求めいただけます。

構成・演出　はせひろいち

講　師　本岡銀子

主　催　(公財)名古屋市文化振興事業団[文化振興部・芸術創造センター]

助　成　芸術文化振興基金

後　援　名古屋市教育委員会

問い合わせ　名古屋市文化振興事業団
チケットガイド　TEL 052−249−9387

出　演　(50音順)
青木まさ子　加藤　祐子　髙橋　和重　広田世津子
伊藤　花純　仮屋　真里　田中　志歩　広田　福世
井上　憲治　工藤　勲　玉岡　舞子　細田　怜那
今井　鉄男　久保田友弘　土屋佐与子　堀井　裕子
大栗　幸子　小木曽琴江　富田　美穂　吉見茉莉奈
尾崎　愛織　後藤あゆみ　野澤　英義　米須賀健太
小関　道代　坂本　祐子　野村　和美
小野　慎吾　清水　香菜　日比野紗彩

平成 23 年度「いろとりどりのラブレター」

練習風景

Information

名古屋能楽堂正月特別公演

能・狂言と文学　―時代を越える“ことば”と“こころ”

室町時代前期に大成した能・狂言は、それ以前に成立した古典文学から題材を得て作られました。そして、能・狂言もまた、後代の文学に影響を及ぼしています。今年度の定例公演では、近現代の小説や戯曲の題材となった能・狂言の作品を主に取り上げ、時代を越えて受け継がれてきた日本文学の魅力をお伝えします。正月特別公演は、お正月に相応しい祝言曲、能「翁」を、山本昌代の小説『善知鳥』から能「葛城」、そして狂言は、正岡子規『病牀六尺』より「酢薑」をお贈りします。

能「翁(おきな)」(観世流)／シテ　清沢一政
　　三番叟　佐藤友彦
能「葛城(かずらき)」(観世流)／シテ　久田三津子
狂言「酢薑(すはじかみ)」(和泉流)／シテ　松田髙義

日　時　1月3日(木)13:00

会　場　名古屋能楽堂

入場料　<指定席>5,000円
<自由席>一般4,000円／学生2,000円
※友の会会員は一割引(前売のみ)
※当日券は自由席のみ500円増となります。

問い合わせ　名古屋能楽堂　TEL 052-231-0088　FAX 052-231-8756

能「翁」

平成24年10月25日発行(毎月1回25日発行)通巻344号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460−0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp/

デザイン・印刷／山菊印刷株式会社

なごや文化情報は、古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

感動を育てる種をまこう。NAGOYA Culture Fund